

## プログラム

### メインテーマ：『鍼灸，柔道整復，看護の未来・夢と本学の役割』

- (1) コーディネーター 研究委員長 樋口 敏宏
- (2) 演題発表（各20分発表）
- 15：10～15：30  
・科学的根拠に基づくスポーツ傷害予防へのアプローチ  
ーストレッチングの特性と適応に着目してー  
〔保健医療学部 臨床柔道整復学講座〕 講師 川村 茂
- 15：30～15：50  
・柔道整復師におけるスポーツとの関わりと本学の役割  
〔保健医療学部 臨床柔道整復学講座〕 講師 神内 伸晃
- 15：50～16：10  
・地域課題に対応できる医療者の育成と町づくりへの貢献  
〔看護学部 地域保健看護学講座〕 教授 佐藤 裕見子
- 16：10～16：30  
・統合医療における看護学部の特徴ある教育の成果と展望  
〔看護学部 基礎看護学講座〕 教授 小山 敦代／准教授 岡田 朱民
- 16：30～16：50  
・明治 Integrative Health モデルの創発と人材育成  
〔鍼灸学部 基礎鍼灸学講座〕 准教授 渡邊 勝之
- 総合討論  
16：50～17：10

## 科学的根拠に基づくスポーツ傷害予防へのアプローチ —ストレッチングの特性と適応に着目して—

川村 茂

保健医療学部臨床柔道整復学講座

われわれのゼミでは、本学学生のスポーツ傷害の観察に超音波画像観察装置を使用し、そのデータの蓄積・分析を行っている。さらに科学的根拠に基づくスポーツ傷害予防へのアプローチをテーマに実験を実施している。その一環として、ストレッチングに関する研究を行っている。この目的は、様々なストレッチング様式の特性を研究し、その各特性を理解した上で、より効果的なストレッチングの適応方法について検討することである。

スポーツ現場において、ストレッチングを実施している光景が頻繁にみられる。ストレッチングには、余分な筋の緊張をとり、関節可動域（ROM）を拡大する効果を有する。とくに静的ストレッチング（以下、SS）において、筋・軟部組織の柔軟性を獲得する効果が高いとされている。しかしながら、このような効果を有する反面、ストレッチング介入直後には、等速性筋力、等尺性筋力など、筋のパフォーマンスが低下することが報告されている。これらパフォーマンスの低下は、とくにSSの実施直後に著明であるとされている。

先行実験において、われわれは、被験者の下腿三頭筋にSSを5分間行わせた際、足関節脱力から自動底屈時の腓腹筋内側頭・外側頭における羽状角（= Pennation Angle 以下、PA）の変動範囲が拡大することを確認した。そこで本実験では、SS介入により筋および周辺組織の性状を変化させた状態（PAの変動範囲が拡大した状態）を意図的に作成し、その対象筋のパフォーマンスにどのような影響をおよぼすのかを検討することとした。

## 柔道整復師におけるスポーツとの関わりと本学の役割

神内 伸晃

保健医療学部臨床柔道整復学講座

柔道整復師が学ぶ柔道整復術には、骨折、脱臼の整復、外傷における患部の固定を保存療法として治療する際、古くから現在に至るまで継承され続けている優れた工夫と技術がある。この技術は、スポーツ現場における外傷の応急処置においても十分に力を発揮することができる。そのため、スポーツ選手やスポーツ愛好家などのケガを含め、コンディショニングを柔道整復師がサポートすることができる。そのため、保健医療学部のカリキュラムでも「スポーツ外傷応急処置実習」という科目を設置し、サッカー、マラソン、スキーなどの競技においてコンディショニングサポートを行っている。

今回のシンポジウムでは、本学で行っているスポーツ外傷応急処置実習の活動内容について活動記録をまとめ、柔道整復師としてのスポーツ現場における関わりと役割について紹介する。また、これらのことをふまえて、保健医療学部でどのような役割を担っていけるか考えたい。

## 地域課題に対応できる医療者の育成と町づくりへの貢献

佐藤 裕見子

看護学部地域保健看護学講座

日本は、今二つ大きな課題を抱えている。それは、人口減少と高齢多死である。2025年には団塊世代が75歳に突入し高齢多死社会が始まる。日本における看取りの80%は病院で行われているが、このまま推移すると2040年には40万人が病院を締め出されることになる。

そこで、国は老いや看取りを病院から地域に戻すためのシステムとして地域包括ケアシステムの確立を図ることとしている。

そうした中、これからの40年の地域包括ケアを担うために求められる人材とは、1) 老いや看取りへの看護(ケア)が担える、2) スピリチュアルな看護(ケア)が提供できる、3) 一人ひとりのつながりを回復し、新しい町づくりを志向できることであると考えられる。

広井は、「人間は社会的な存在であり、コミュニティにおいて自分を知っている人と時間を共有し、かかわり持つことにおいて、生きているといえる。存在をしっかりと“ケア”してもらうことで、自分は生きているという自己肯定感を持つことにつながる。」また、コミュニティとは本来「死」という要素をその本質に含むものである。一人ひとりが高齢期あるいは終末期を高いスピリチュアリティを持って生きていくためには、「死」を含むコミュニティの再構築が重要である。個人とコミュニティをつなぐものが「ケア」であるとも言っている。

今後、人と人とのつながりを回復できる町づくりが求められる。

参考文献：広井良典. 人口減少社会という希望. 朝日新聞出版, 2014.

## 統合医療における看護学部の特徴ある教育の成果と展望

小山 敦代・岡田 朱民

看護学部基礎看護学講座

近年医療に対する考え方が西洋医学のみならず、未来型医療として統合医療の方向に変わりつつあり、本学は“Meiji University of Integrative Medicine”と、名称は先陣を切っている。

本看護学部は、2006(平成18)年に開設され、次年度には10期生を迎えるに至った。教育の特徴は、統合医療の理念を看護学に導入し、人に優しく全人的なケアができる看護専門職者育成を目指している。カリキュラムには、東洋医学や補完代替医療/療法(Complementary and Alternative Medicine/Therapies; CAM/CAT)に関する科目を開講し、看護実践に必要なアプローチの幅を広げることにより、対象のニーズに沿ったこれからの時代に必要な看護実践力を培うことがねらいである。

1～4期生の卒業前調査「CAM/CAT教育の学びと課題」では、臨地実習において看護ケアに「マッサージ」「アロマセラピー」「指圧」等を取り入れており、動機は「リラクゼーション効果」「苦痛緩和」等、少しでも安楽が提供できたらという思いで臨んでいた。5期生では、89%がCAM/CAT教育に関心を持って学び、80%が満足していた。こうした結果から特徴ある教育の意義は大きいことが明らかになった。7期生からの新カリキュラムでは、統合医療評価認証機構認定アロマセラピーコース(選択)開設により更なる期待ができる。

また、開設時から本学の特徴ある内容の講演会・シンポジウムの開催や、継続教育の一環としてヒーリングタッチ、リラクゼーション、アーユルヴェーダ等の研修会を開催し、多くの修了者を出してきた。展望は、これからの時代に必要な“癒し”“自然治癒力”“セルフケア”への「看護の力」をもった看護師が明治で育ち誇りを持って活躍することであり、未来型統合医療における看護学部として発展していくことである。

## 明治 Integrative Health モデルの創発と人材育成

渡邊 勝之

鍼灸学部基礎鍼灸学講座

現在の様々な閉塞感を打破することを目的として、大学教職員・学生をはじめ卒業生有志らと共に、「大学・業界・学会との連携構築」ならびに「大学の使命」について、様々な視点・立場から議論してきた。

そこで気づいたことは、社会・医学・医療のパラダイムが大きく変化しつつあり、これまでの〔患者・病院システム〕から新たな〔生活者・健康支援システム〕への移行であった。本学は両システムを包含した、独自のモデルを創発することにより、現代の医学・医療に貢献しうる、人材育成が必要不可欠となる。

モデルの3本柱として、①明治国際医療大学の「ブランド力の回復と向上」②「誰からも求められる、地域に愛される大学の創出」③世界に誇る「人のライフサイクルに資する鍼灸学の確立」を立てた。

上記理念に基づき、両システムを統合した【明治 Integrative medicine & Health】のモデル案を作成した。本学の魅力的な価値を創出し、Leading University としての姿を取り戻すことが急務である。